

「国際障害者年から40年」

日本赤十字社 参与 三井 俊介

NPO法人 練馬区水泳連盟(以下、練水連)が練馬区との共催で毎年開催してきている「ノーマライゼーション水泳フェスティバル & ユニバーサルスポーツチャレンジ」が今年10月24日開催分で24回目を迎えます。私の好きな言葉の一つである「継続は力なり」の具現化そのものと言えるのではないかと思います。練水連会員・役員や練馬区民・区を始めすべての関係者に敬意を表します。

久し振りに本棚から「障害者と水泳(原題: ADAPTED AQUATICS)」(アメリカ赤十字社編/日本赤十字社発行=1982年3月)を引っ張り出しました。この本は、今から40年前の1981年(昭和56年)が国連の定めた「国際障害者年」=テーマは【完全参加と平等】=に当たることから、日本赤十字社がこれを契機に障害者に対する水泳指導の見直しを行うためにアメリカ赤十字社の許可を得て翻訳・出版したものです。同書は全13章で構成されており、その第7章「メインストリーミング」では、その意味について、障害者を障害を持たない人々のクラスへ帰し、彼らの能力と欲求に基づいて成功と有意義な体験をさせることと記されています。そして、障害よりも水泳能力に焦点をおいたプログラムが、障害を持たない者と一緒に典型的な水のプログラムに沢山の障害者が参加することを許すであろう。と続きます。次にノーマライゼーションについて、典型的な生活様式とできる限り同じようにした生活条件を整えるための努力は、数多くの障害者が施設から出られるという結果をもたらした。施設不用論者(原文ママ)たちは、もし一般社会に障害者がいなければ、障害者に対する社会の見方が改善されるであろうということを信じるのは、非現実的であると示唆している。相互に影響し合うことが障害者と障害を持たない人に利益となるであろう。とあります。

過日、地元図書館に出掛けた際に一冊の書に目が止まりました。ユニバーサルデザインの基礎と実践(一社:日本福祉のまちづくり学会)という書名です。同書冒頭の「推薦の言葉」で、中央大学研究開発機構:秋山哲男氏は次のように記しています。

ノーマライゼーションは1950年代にデンマークのN.E.バンク・ミケルセンによって提案された。どのような障害があろうと一般市民と同等の生活と権利が保障されなければならない、とするもので基本的な人権をベース

に提案され、わが国の障害者福祉制度の根幹を成している。1970年代に広まった、障害者を中心に建築などの物的環境を変えようとするバリアフリーデザインや、年齢・性別・国籍などの違いや障害の有無にかかわらず、できるだけ多くのひとびとに使いやすい製品や環境をデザインするユニバーサルデザインといった考え方は、現在となっては多くのひとが認識しているデザイン概念である。

こうしたバリアフリー・ユニバーサルデザインの概念が「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」やガイドラインにより、公共交通や建築物・公園などに適用されているにもかかわらず、なぜこの本が必要になってきているか。それは一言で申し上げれば、これらの法律などには役に立っているものとそうでないものがあるからである。たとえば、幅や高さなどといった見てわかる基準には有効に機能しているが、音や光など見てわからない基準やデータの場合は対策がおろそかになりやすい。この事例として、段差解消・誘導ブロックの敷設・多機能トイレ・ホームドアの設置・スロープ設置・昇降機の設置の実現が挙げられていますが、他方では「灯り」や「音サイン」などの実効性や妥当性に問題があると指摘しています。「プラスのデザイン」から「マイナスのデザイン」へという実践編では音環境を例にしつつ、難聴者のための移動支援用音案内に関するJIS規格では、音サインや音案内を周辺環境音(暗騒音)より10dB以上大きくするよう求めていることから、暗騒音レベルが高い環境では、より大きな音で音サインを発しなければならない。これは言わばプラスのデザイン。しかし、このような方法では、それを必要としないひととの間の利害摩擦を生みだしてしまうことになる。だとしたら、周囲の周辺環境音を小さくすることにより小さな音でも難聴者のひとにも音が明瞭に聞こえることになる。この考え方が「マイナスのデザイン」というわけです。

今秋開催予定の「ノーマライゼーション水泳フェスティバル & ユニバーサルスポーツチャレンジ」の盛会を希いつつペンを置くことにします。

